

高齢者に対する腹腔鏡下胃切除術の意義

まつ ばら たけし ひら はら のり ゆき
松 原 毅 平 原 典 幸
たに うら たか ひと た しま よし つぐ
谷 浦 隆 仁 田 島 義 証

キーワード：高齢者，腹腔鏡，胃癌，合併症

要 旨

低侵襲手術の進歩に伴い術後合併症の頻度は低くなった。今回，高齢者に対する腹腔鏡下胃切除術の意義を検討した。

【対象と方法】腹腔鏡下胃切除術を施行した胃癌症例を80歳以上の高齢者群と80歳未満の非高齢者群に分け，臨床病理学的背景因子などを比較した。

【結果】高齢者群では複数の併存疾患を有する割合および D1，D1+ 郭清が有意に多かったが，全術後合併症の頻度，3年全生存率に有意差はなかった。呼吸器合併症は高齢者群で有意に多く，呼吸器合併症を発症した高齢者に長期生存例はみられなかった。

【結語】高齢者に対する腹腔鏡下胃癌手術は呼吸器合併症の発生頻度が有意に高く，多職種医療チームの連携が重要と考えられた。

はじめに

日本人の平均寿命は世界最高水準にあり，他国に類をみない速さで超高齢化が進行している。近年，身体への負担を減らす低侵襲手術が発達し，周術期管理の進歩も相俟って胃癌領域においても高齢者に対する根治手術が積極的に行われている¹⁾。しかし，高齢者胃癌症例に外科的治療を施行する際には，定型手術を行うことで得られる根治性の向上，一方で侵襲に伴う合併症発生といっ

た相反する側面からの判断が必要となる。高齢者に対する胃癌手術に起因する他病死の有意な関連因子は術後合併症であり，術前併存疾患の有無やリンパ節郭清度は関与しないという報告がある²⁾。一方，胃癌術後合併症の発生頻度は一般的に30～40%であるのに対して85歳以上では60%に達する³⁾。さらに高齢者に対する低侵襲手術が術後合併症を軽減するとの報告がある。従って，適切な手術および周術期管理によって生存期間を延長できる可能性がある。

今回，胃癌に対する腹腔鏡手術の手術成績を高齢者と非高齢者で比較検討し，その意義を検討した。

Takeshi MATSUBARA et al.

島根大学医学部消化器・総合外科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部消化器・総合外科